

大野道夫歌集『秋意』

本田一弘

名を歌う意志

集名の「秋意」について、大野は「あとがき」で「秋の意志ぐらいに思っていただければ幸いである」と謙虚に述べている。だが、これまで秋の気配、秋の風情、秋の趣と総じて「寂しい」といった意味合いで使われてきた語に、「秋の意志」という能動的な意味を付け加えたのは斬新だ。

歌集名に『秋階段』『冬ピア・ドロローサ』『春吾秋蟬』『夏母』と季節の名を掲げてきており、今回で「秋」は二まわりめ。秋はもの思う季節だが、私は大野を「もの思う」、いや積極的に「もの」を思っている意志の歌人だと思っている。大野の作品世界は幅広く、その「もの」には様々な語が代入されるが、今回はとりわけ「名前」を歌った作品が多いことに注目した。

・「綱」の名の男らんらん現れて埋められ
てゆく親族の席

二〇一一年二月、佐佐木由幾主宰が亡くなった。大野にとつては大叔母にあたり、その葬儀の席の様子である。「綱」を名に持つ佐佐木家の男たちが続々と集まってきて席に座る。「らんらん」というユニークなオノマトベとともに、湿っぽくながりがちな挽歌を独自の発想で歌った。「綱」という名を通して大野は大叔母を悼んでいる。

・四年後の入試に出さむか人名を吸い付く
したる「東日本大震災」よ
・教科書へ書かれる「東日本大震災」よりも書かれることなき死者の名こそを
命名によつて、ものは意味をもち、存在する。が、逆に切り捨てられてしまうものもある。「東日本大震災」と名づけることによつて、その災害により失われた数多の人の存在が蔑ろにされてしまう危険性を指摘し、まるで生き物のように人名を吸いつけてしまふと歌う。これらの歌から、私

は、これから先ずつと教科書へ書かれることのない人間の命をうたい続けようとする歌人の意志を感じる。

・人名が人名へ還るまでの死を埋めしスタ

1 リングラードよ

革命家スターリンの名を冠した町が、失脚によつて改名されたが、その後また元の名に戻っている。大野のまなざしは、政治状況に翻弄される社会の裏側に張り付いている死者の存在を決して見逃さない。

・二日早く生まれしなれば地を歩み癒しに行けり両膝も折り

・祖父をまね皆へ手を振るヒサヒトちゃん
一家の名札に苗字は見えず

「苗字なきご家族（七首）」より二首引いた。一首目の詞書には「世帯主は十二月二十三日生まれ、戸籍はない」とある。もちろん現在の天皇を歌った作。二日後に生まれたキリストと天皇との対比が辛辣だ。苗字がないということの悲しみに心を寄せつつ、天皇が「癒し」に行く行為を見つめて淡々と叙述する。二首目、苗字なき家族の一員であるヒサヒトちゃんの、疑いもなく手を振る動作が何だか怖く見える。

大野道夫。この名前の意味そして響きも明らなくてよろしい。大きな野原に一本の道、その道を歩く男。『秋意』は名を歌い、社会の問題を鋭く批評しようとする意志をもった男の歌集である。